

日中の高温による施設農作物等の管理について

令和2年(2020年)4月24日

上伊那農業農村支援センター

1 水稻育苗ハウス

- (1) 種子予措の浸漬、催芽を直射日光下で行っている場合、温度が上がり発芽の不斉一、細菌性病害の発生につながるため、日よけなどを設置し、浸種では15℃以上、催芽では28℃以上にならないようにする。
- (2) 播種後のトンネル、育苗パイプハウス方式での高温管理は、細菌性病害、焼け、苗立枯病の発生につながるため、下記により適温管理を徹底する。
 - ア トンネル、育苗用パイプハウスでの平置き出芽方式(特にアルミ・ポリフィルムと不織布の被覆)を行っている場合には、出芽前からビニールを開ける等の換気に留意し、床土温度が28℃以上にならないようにする。
 - イ 高温管理による第1葉鞘の徒長は、軟弱徒長苗につながるため、出芽後から1葉期までの換気に留意する。育苗中の換気は早朝日の出とともに開けることを基本とし、田植えが近くなり、霜の心配のない日は夜間も開放する。また、目の細かいネットをサイドに張っている場合は換気が不十分となるため、高温時は開放し換気を促進する。
 - ウ 日中に灌水する必要がある場合は、ハウス内、配管内に残った水が熱水になっている場合があるため、灌水開始時は温度確認を行う。
 - エ プール育苗において、出芽後の緑化終期の湛水開始前に乾燥する場合には、プール床への浅水入水等による水分補給を行う。

2 果樹

- (1) リンゴ
開花期の前進に備えて、人工受粉用の花粉や花粉媒介用のハチ類を早めに準備する。また、品種の違いによる開花の早晩が平年と異なることも予想されるため、開花期が揃わない場合は人工受粉を行う。
- (2) 施設ブドウ
日中の施設内温度を30℃以上の高温としないよう、換気を十分に行うなど注意する。
- (3) 施設オウトウ
オウトウの開花～硬核期の日中の最高温度の適温は20～22℃である。最高温度が25℃以上とならないよう、換気を行う。

3 野菜・花き全般

- (1) 施設栽培や育苗施設では、強日射による急激な温度上昇等を防止するため、寒冷紗や遮光(遮熱)資材を用いて、できる限り室温上昇の抑制に努める。
また、循環扇等を利用して適切な換気を励行するとともに、ハウス側面や妻面のビニール被覆等を日中巻き上げたり、施設内外及び周囲の遮へい物を整理するなど通風の改善を図る。
- (2) ハダニ類・アザミウマ類などの発生が増加しやすいため、適期防除に努める。

3-1 野菜

- (1) トマト・ミニトマトなどの施設果菜は、日中の生育適温をできるだけ維持するため、ハウスの側面や妻面を解放して換気に努める。なお、翌朝に低温が予測される場合は、夕方早めにハウス側面等の被覆を下げ、保温管理を徹底する。

3-2 施設花き

- (1) カーネーション
寒暖差が大きいと節折れや節曲がりが発生しやすくなるため、晴天日の日中は25℃以下を目標

に換気を行う。高温が続くとハダニ類等の害虫発生が前進化する恐れがあるため、発消長の確認と適期防除に努める。

(2) トルコギキョウ

定植直後の場合は遮光資材の被覆を行う。土壌が乾燥すると初期生育が遅れるので十分な灌水を行う。定植後にトンネル被覆を行っている場合は葉焼けを防ぐため日中は開放する。ハウスの換気も適宜行うが、直接冷気に触れると生育遅延を招くので側窓換気を行う場合は特に注意する。

抽台初期～発蕾期では葉先焼け（チップバーン）が発生しやすいため、曇天日も含めて日中の換気を行い風通しがよくなるように管理する。

(3) アルストロメリア

日中の高温により、葉焼けや花梗の軟弱化などの品質低下が起きるため換気を徹底する。